

動詞ハシルの慣用表現について

趙 南 弼

1. はじめに

ある動詞句を連語としてみとめるか慣用句としてみとめるかは容易ではない。本稿では現代日本語における動詞句の中、動詞ハシルの動詞句を対象にして、構成要素間の意味的及び文法的な連結と相違について述べたい。動詞ハシルの動詞句を典型的な例として構成要素の関係から慣用句の認定と規定を定めることを目的とする。この分析をとおして、動詞ハシルの動詞句における慣用表現について検討したい。

2. 先行研究

動詞ハシルについては主にその意味記述及び意味派生の研究が行われてきた。宮島(1972)では動詞ハシルの意味記述について、純粋に速度だけの特徴としてほかの動詞から区別されるものは、和語の基本的な動詞にはない、また主体の数は限定されていなくて、人間・動物以外の主体は、「うごく」と対立すると述べている。森田(1989)では動詞ハシルの意味派生に関して、動詞ハシルの「事物が勢いよく進む／激しく動く」表現として「筆／光・虫酸ガハシル」などの例をあげ、動詞ハシルの本来の使い方であるが、今日残っている用例はごく限られていると述べている。ところが、従来の研究で動詞ハシルの慣用表現について、十分な検討が行われているとは言いがたい。

本格的な慣用表現(慣用句)の研究は、白石(1969)から始まる。氏は構成要素間の意味関係から「成句的慣用句」を設定し、慣用句たる成句的慣用句を、「構成要素の両者が結び付いて意味がはっきりするもの(「気がきく」)」「句全体の意味が構成要素の語の意味だけでは理解できないもの(「腹が立つ」)」と「一方の意味が比喩からきているもの(「半日をつぶす」)」「構成要素の語がその意味以上のものを暗示するもの(「頭をかく」)」とに分けている。そして、前者の二つだけをイディオムとして認めている。ところが、言語現象における慣用句の存在の認定を追求しなかったため、慣用句の本質規定のあいまいさが生じているとの批判をうけている。

高木(1978)は、慣用句を「連語相当のもの」と「文相当のもの」に分けている。氏は文相

当の慣用句の説明はしていないものの、連語相当の慣用句については意味／形式的に詳しく考察している。まず、氏は意味的に連語相当の慣用句を構成要素が現実世界を反映している動機づけの有無によって分け、構成要素の全体また各々が現実を反映しているものを「慣用的ないまわし」、構成要素の一方だけが現実を反映しているものを「慣用的なくみあわせ」にタイプ分けしている。形式的には一つの単語が文法的能力を持っていることから、構成要素の単語性のよわまり・喪失を「語形変化（格の交替、命令形、使役形、受身形）」の可否などで把握し、慣用句の固定性を説いている。ところが、構成要素の単語性の認定に段階があることを指摘しているだけで、段階の本質の把握及び処理は行っていない。また、氏は慣用句表現における比喩的な性格を慣用句の本質的な特徴としてとらえていないが、比喩的な表現を起源とする動詞句が存在することから、比喩的な性格を慣用句の特徴として捉えた方がよいのではないと思われる。たとえば、「口火を切る」の場合は、構成要素である「口火」が「比喩的に物事が起こるきっかけ」を表していることを起源としている。

宮地(1982)は、慣用句を一般の連語句より結合度が高い「連語成句的慣用句」と、比較的是っきりした比喩的意味を持つ「比喩的慣用句」に分けている。氏は「連語成句的慣用句」の形式的特徴を説明するため、連体句（何々の～、形容詞）を付けて構成要素においての名詞の文法機能を生き返らせることを試みた。「比喩的慣用句」の特徴を説明するため、直喩の形式には「～ばかりの、ほどの」の結合、隠喩の表現には語句の意味が派生的・象徴的な比喩的意味の把握を説いている。その他、氏は品詞別の特徴（動詞慣用句の67%がヲ格で結ばれている）、語彙的な特徴（身体・心情語彙の慣用句表現）を述べているが、氏の研究の功績は慣用句を形式上の制約から、「命令形、意志形、受身形、否定形、敬語化、連体修飾、副詞の修飾」の表現変化の可否に分け、それらを更に分類し分析したところにある。ところが、一般連語句と慣用句の認定における考察は詳しく行われておらず、慣用句の段階的な処理には問題点がある。

本稿では、以上の先行研究を踏まえて、慣用句の認定の基準として動詞句における動詞の実質性の把握の方法を提示する。

3. 動詞ハシルの動詞句

近現代の文学作品から動詞ハシルの動詞句の類型と用法を列挙する。用例の収集については、動詞ハシルの語形変化及び終止形・連体形を考慮に入れず、動詞ハシルを中心に結合する名詞の類型別に収集した。ただし、複合的な意味をもつ複合語は慣用表現とは深く関わっていないので、収集対象から除外した。用例中には係助詞ハ、格助詞ノから成っている例文もふくむ。動詞ハシルの当て字としては、「走」の以外にも、「駛、趨、奔、趁」に成ってい

る例文も考慮に入れて収集した。

表1 参考資料における作品名と動詞ハシルの動詞句の述べ語数

作品名	或	生	越	貝	競	恐	金	草	古	少	塩	聖
延べ語数	19	1	8	1	5	23	16	8	7	8	18	31
作品名	星	太	鎮	土	野	半	彼	ふ	夫	モ	榆	雪
延べ語数	1	10	6	13	10	2	1	8	3	2	50	1

- (1) 伝令ガハシル：大天幕を、足早に多くの兵が出入し、伝令が、隊から隊の間をはしつた。(宮本百合子『古き小画』)
- (2) トラックガハシル：国道には、絶えず戦車やトラックが走り、各所にゲリラの屯所があつて、この国道を突破するのが、半島の西南端パロンボン集結の革命令を受けた、レイテ島の全将兵の重大問題であつた。(大岡昇平『野火』)
- (3) 水ガハシル：あとへ引返して、すぐ宮前のとまり通から、小橋を一つ、そこも水が走っている、門ばかり、家は形もない—くぐり潜門を押して入ると—植木屋らしいのが三四人、土をほって、運んでいました。(泉鏡花『半島一奇抄』)
- (4) 雲ガハシル：車に乗ろうとして空を見上げると、雲はそう濃くはかかっていないと見えて、新月の光がおほろに空を明るくしている中をあらし模様の雲が恐ろしい勢いで走っていた。(有島武郎『或る女』)
- (5) 風ガハシル：朝からどんより曇っていたが、雨にはならず、低い雲が陰気に垂れた競馬場を黒い秋風が黒く走っていた。(織田作之助『競馬』)
- (6) 枯葉ガハシル：いつの間にか、秋はたけ、外には鈴懸樹の枯葉が風とともに舗道に走っていた。(海野十三『生きている腸』)
- (7) 稲妻ガハシル：深夜の空にはときどき稲妻が走っていた。(三島由紀夫『金閣寺』)
- (8) 観念ガハシル：彼の観念は彼の室の中を駆け廻って落ちつけないので、制するのも聞かずに、戸外へ出て縦横に走った。(夏目漱石『彼岸過迄』)
- (9) 戦慄ガハシル：最初に強い風がまともにわが頬に当たったとき、ほとんど官能的と云つてもよい戦慄が私の肌を走った。(三島由紀夫『金閣寺』)
- (10) ボウルガハシル：手足が、一秒の何分の一かの呼吸で、きっちりと端正に動き、ボウルが、言いふくめてやった意図通りに走って行く。(曾野綾子『太郎物語』)
- (11) 影ガハシル：すると、河原の向う岸に、四五人の人影が固まって歩いているのに気がついた。彼らは上流の方へ向って歩いている。が、とつぜん彼らはひっかえし

た。影が長くなった。その先頭に、小さい影が一つ走っていた。(海野十三『少年探偵長』)

(12) 歌ガハシル：注意して置きたいが、丁度その頃は、大阪の街は、ネオンサインとジャズとで充満し、低劣な流行小歌は、電波の様に夜空を走り、放浪児の若い肉体の弱点という弱点を刺戟して、僕は断腸の想いがしていたのである。(小林秀雄『モオツァルト』)

(13) 声ガハシル：忠平は、どきりとした。こちらへ歩いてくる女をみたとたんに、思わず咽喉から驚愕の音が走った。「そ、園子」。(水上勉『越前竹人形』)

(14) 音ガハシル：下宿の窓の下を下駄の音が走る。走っているのは僕だ。以前のことを思っては駄目だ、こちらは毎日に苦しくなっていく……父の手紙。父の手紙は僕を揺るがす。(原民喜『鎮魂歌』)

(15) 汗ガハシル：お辰は存分に材料を節約したから、祭の日通り掛りに見て、種吉は肩身の狭い想いをし、鎧の下を汗が走った。(織田作之助『夫婦善哉』)

(16) 涙ガハシル：その信夫を、ふじ子は静かに見返した。恐ろしいほど澄んだ目である。と、その目にさっと涙が走った。(三浦綾子『塩狩峠』)

(17) 地球ガハシル：「はげしすぎることはありません。そのわけはこうです。地球は一秒間に三十キロメートルの速さで、空間を走っているのです。重力があれば建物も人間も、地球の表面にすいつけたまま、このすごい速さで公転していくのですが、重力がなくなると、あのとおり、建物も人間も、あとへ取残されてしまいます。そして人間もけだものも植物も、みんな死んだり枯れたりしてしまいます」(海野十三『ふしぎ国探検』)

(18) 月ガハシル：凍った月は東から西へ走るのではなくカーディオイドに似た閉曲線をえがいてぼくたちをとじこめていた。(倉橋由美子『聖少女』)

(19) 星ガハシル：南の空を、赤い星がしきりにななめに走りました。(宮沢賢治『貝の火』)

(20) 火ガハシル：葬式にも出たらいかんて、そんな話があるもんかと頭の中を火が走った。(織田作之助『夫婦善哉』)

以上のような例文を収集したが、動詞句内の名詞と動詞ハシルとの関係は固定した形式、いわゆる慣用句ではない。構成要素間の結合度の段階性は存在するが同類の名詞への交替が可能な「連語」である。一方、以下の用例では構成要素である名詞と動詞ハシルとの固定度に差がある。

(21) 道路ガハシル：往來の少ない通りなので、そこには枯れ枯れになった首蓨が一面に生えていて、遊廓との界に一間ほどの溝のある九間道路が淋しく西に走ってい

た。(有島武郎『星座』)

(22) 亀裂ガハシル：更に大理石の光沢を誇る壁にも円柱にも、ところ嫌わず汚辱のような亀裂が走っていた。(北杜夫『榆家の人びと』)

(23) 耳ガハシル：あの声はと、耳の走る見当を見較ると——向うにいた。花ならば海棠かと思わるる幹を背に、よそよそしくも月の光りを忍んで朦朧たる影法師がいた。
(夏目漱石『草枕』)

(24) 目ガハシル：二人の目は驚異の表情を落えて、その白樺の皮の上に走った。(佐左木俊郎『恐怖城』)

(25) 筆ガハシル：数日苦しんだ末、突如として筆は走り、図は成った。(小林秀雄『雪舟』)

(26) 虫酸ガハシル：田村へ帰って、ママに無心すれば、金は出来ぬこともなかったが、陽子が昨夜泊ったのかと思えば、田村へ帰る気はせず、それにもともと嫌いだっただママのことが今は田村と共に虫酸が走り、顔を見るのもいやだった。(織田作之助『土曜夫人』)

(27) 噂ガハシル：町中に噂がはしる。

以上のような動詞ハシルの動詞句には構成要素の文法的機能が働く連語から慣用句として認めるべき動詞句までの段階がある。それは全体が一つの単語たる意味をなす意味的な面と構成要素の形式的な面から考慮すべきである。たとえば、「筆がはしる」の場合には「(ボールペンで書いている人を見て)筆がはしっている」のようにも表現する。いわば、「筆がはしる」の「筆」が実質的な意味を持っておらず無意味化している。「筆」が自立はするが、無意味形態素になる例であり、宮島(1994)が言っている自立できない単語だけが無意味形態素になるわけではなく、自立できる単語の場合も無意味化した無意味形態素になる。

4. 動詞ハシルの動詞句の名詞

参考資料を含む近現代の文学作品から収集したガ格から成っている動詞ハシルの動詞句の構成要素である名詞を、その意味的な分類や近接性によって類型別に分けて網羅する。

4. 1 人や動物

伝令 行人 近習 家来 寮監 鼠 馬 蛇 魚 蜥蜴 野次馬 など

4. 2 乗り物類

トラック 戦車 船 舟 蒸気船 自転車 エレベーター ロケット 自転車 など

4. 3 液体類

水 細流 急流 波 山波 小流れ 小雨 海水 生唾 (水)銀 露 汗 涙 など

4. 4 道具(筆、刃物、器械)

筆 ペン 万年筆 洋筆 絵筆 鉛筆 矢 槍 短刀 妖刀(ねたば) 白刀 剃刀
バリカン 器械 など

4. 5 目で見られる気体類

雲 雪 粉雪 黒雲 煙 雨雲 水蒸気 霧 など

4. 6 風、紙類

風 幣 枯葉 など

4. 7 状態を表す名詞

亀裂 割れ目 ヒビ など

4. 8 線状を表す名詞類

道路 筋 青筋 細流 井戸縄 路 根 尾根 線路 レール 鉄道線 糸 路 血管
木目 樹の枝 小路 通路 街道 小坂 縁(ふち) モール 秩父の諸嶺 脈 など

4. 9 光や電気類

稲妻 光り物 光線 雷光 スパーク 残光 朝の陽 火 炎 電気 影 翳
人影 など

4. 10 人間の精神を表す名詞類

戦慄 悪感 興奮 緊張 悪寒 恐怖 感覚 動揺 震え しびれ 痙攣 緊張感
痛み (狼狽の)色 表情 情 屈辱感 感情 嫌悪感 おそれ 感動
衝撃 不安 笑い 驚き 空想 意識 観念 呪い 自尊心 など

4. 11 音類

音 声 歌 詩 足音 サイレン 喧噪 など

4. 12 玉類

銃丸 弾 魚雷 ボウル(ボール) など

4. 13 身体、感覚器官

手 足 爪の先 / 目(視線) 耳 など

4. 14 星類

星 月 地球 など

4. 15 その他

噂 虫酸 など

以上のような名詞類を収集したが、動詞ハシルの動詞句は、構成要素である名詞が有情物の場合には、動詞ハシルの実質的な意味があらわれる。一方、構成要素である名詞が無情物の場合には、動詞ハシルの実質的な意味は薄れていき、比喩化にすすむ。その比喩化した表

現が時間を経て、一般の人々に使われながら、形式的にも意味的にも固定した慣用表現が慣用句になる。

5. 動詞ハシルの動詞句の慣用表現

日本語の動詞句を構成要素の意味的及び文法的な面から考える場合には、次のとおり三つに分けることがある。

(28) 参加者の皆がはしる。(連語)

(29) そのセリフを聞くたびに、虫酸がはしる。(慣用句)

(30) 悪事千里をはしる。(ことわざ)

ところで、この分類の基準には段階的な差がある。連語と慣用句の認定には構成要素の現実的反映が文によってことなる。従来、慣用句の定義は、意味的に二つの構成要素がお互いに総和して一つの単語の意味をもつことである。更に構成要素の断片が現実世界を反映していない、いわゆる、構成要素が独自の単語性をうしなっていることを規定している。ところが、従来の規定にしたがって慣用句とみとめるべき動詞句にも、その動詞句の意味を把握する場合に、文によって構成要素の一方が現実世界を反映する、いわば単語性を持つ単なる連語として把握すべきところがある。

(31) 白い端正な顔立ちの似顔絵に、ずっと筆が走る。

(32) 筆が走る時は楽しくて気持ちいい。

同じ動詞句の「筆が走る」と言っても、上記の(31)の例文の場合には、「似顔絵の上に筆が動く」ことであって、「筆」が現実世界を反映し、構成要素の断片が単語性を有している単なる連語である。その反面、(32)の例文の動詞句「筆が走る」の場合は、「文がすらすらとかける時は楽しくて気持ちいい」あるいは「字がうまくかける時は楽しくて気持ちいい」ことを意味することであって、構成要素の断片が両方とも現実世界を反映していない。

本稿では連語形式を「連語」、「文の慣用句」、「慣用句」、「ことわざ」の四つに分ける。「連語」は構成要素の結合が特定の単語ではなく、一般的に自由なものである。「文の慣用句」とは、動詞句の全体が一つの単語の意味を持ちながらも形式的には構成要素の文法的特徴が揺れるもの、あるいは、動詞が実質的な意味をもっていないもの、いわばある程度の意味的な限定が加えられていて慣用句化が進んでいる動詞句を本稿では「文の慣用句」と呼び、「連語」と「慣用句」の中間的な性質の動詞句として設定する。

「慣用句」は動詞句の全体が一つの単語の意味を持ちながら、形式的にも構成要素が固定していて、宮島(1994)が指すように特定の慣用句の中にしかあらわれない無意味形態素を有するものである。ところが、無意味形態素は動詞句の構成要素である動詞にも存在する。実

質的な意味を持っていない動詞句の動詞の場合がこれにあたる。たとえば、「道路がはしる」、「笹がはしる」、「噂がはしる」、「虫酸がはしる」などの例において、これらの動詞句の構成要素である動詞ハシルは実質的な意味をもっていない。いわゆる、比喩的な意味を持つ動詞句である。

慣用的な動詞句の表現に「慣用句」と「ことわざ」とがある。この二つの慣用表現は意味的また形式的に区別することができる。たとえば、慣用句と思われる「虫酸がはしる」は心理描写、現象描写、感情表現である。一方、ことわざである「悪事千里をはしる」の場合は、心理・現象・感情の表現ではなくて、出来事が起きて、悪い噂が広がることを意味する。また、口頭語には使わない。ことわざは語活用形（「虫酸が走りそうだ」のような助動詞の結合）がなく、慣用句とは語学的に使い方が違う。

6. 動詞ハシルの実質性

実質性を有する動詞ハシルは「人がはしる」が例になる。それに比べて、「虫酸がハシル」の場合には、動詞の実質性が表れる状態ではない。「嫌気がハシル」のように類似した名詞類の置き換えが可能にも係わらず、「虫酸がハシル」が慣用句と言える根拠は動詞ハシルが実質性を失っていて、構成要素である「虫酸」が動詞ハシルとしか結合しないところにある。これは類似表現である「嫌気がハシル」が「嫌気がさす」などのように構成要素である動詞を置きかえられることと異なる。

本稿では、「連語」と「慣用句」の中間的なものとして「文の慣用句」を設定した。実質性が生きている動詞の種類から構成される動詞句こそ慣用化からかけ離れていく。無意味化した動詞からなっている動詞句は慣用化に進んでいく。たとえば、「笹が〜」の後側に結合できる動詞には、「はしる、進む、滑る、動く、向く、弾む、記す」などがある。「笹がはしる」は全体が一つの単語の意味をも表せる動詞句でありながら、上記のような実質性を有する動詞との交替が可能なところから、慣用化に進んでいる動詞句である。一方、「うわさが〜」の後側に結合できる動詞には、「はしる、広まる、流れる、回る、とびかう、一人歩きする」などがある。うわさの無意味化が起らないながらも、結合する動詞は実質性をうしなっている。以上のような表現は各々の構成要素の結合に、ある程度の意味的な限定が加えられている。いわゆる、本稿で提示した慣用化が進んでいる「文の慣用句」である。慣用化が進んでいるだけに、比喩的な性格が強い。ところが、「虫酸がハシル」は「虫酸が〜」の後側に結合できる動詞が「はしる」しかない。構成要素である動詞ハシルは動詞の実質性を失って無意味形式になっている。いわゆる、「慣用句」である。

このようなところから、宮島（1994）のように名詞の一方だけでの無意味形態素の判断は

不十分で、構成要素である動詞の無意味化も考慮に入れて慣用句を把握すべきであろう。

7. むすび

結合が自由な「連語」と固定した単語の意味をもつ「慣用句」の間に段階性が存在することはしばしば言われている。本稿では、その段階性の中間的なものを「文の慣用句」として設定した。これは形式的だけではなくて、意味的にも、構成要素の各々が現実世界を反映している「連語」、構成要素のいずれかが現実世界を反映している「文の慣用句」、構成要素の全体が現実世界を反映している「慣用句」、による分け方でもあって、形式的にも意味的にも統一的な単語の意味把握につながる。

【参考文献】

- 国広 哲弥 (1985) 「慣用句論」『日本語学』4-1 明治書院
白石大二編 (1969) 『国語慣用句辞典』 東京堂出版
高木 一彦 (1978) 「慣用句研究のために」『日本語研究の方法』松本泰文編 むぎ書房
松本 泰文 (1995) 「単語・連語・慣用句」『日本語学』14-5 明治書院
宮島 達夫 (1972) 『動詞の意味・用法の記述的研究』 秀英出版
—— (1994) 『語彙論研究』 むぎ書房
宮地 裕 (1982) 『慣用句の意味と用法』 明治書院
村本新次郎 (1985) 「慣用句・機能動詞結合・自由な語結合」『日本語学』4-1 明治書院
森田 良行 (1985) 「動詞慣用句」『日本語学』4-1 明治書院
—— (1989) 「慣用句」『ケーススタディ日本語の語彙』 おうふう社
—— (1989) 『基礎日本語辞典』 角川書店

【参考資料】

背空文庫系資料

有島武郎『星座』、泉鏡花『半島一奇抄』、海野十三『ふしぎ国探検』・『生きている腸』・『少年探偵長』、織田作之助『競馬』・『夫婦善哉』・『土曜夫人』、佐々木俊郎『恐怖城』、夏目漱石『彼岸過迄』・『草枕』、原民喜『鎮魂歌』、宮沢賢治『貝の火』、宮本百合子『古き小画』

新潮文庫 CD-ROM 系資料

有島武郎『或る女』、大岡昇平『野火』、北杜夫『榎家の娘びと』、倉橋由美子『聖少女』、小林秀雄『モオツァルト』・『雪舟』、曾野綾子『太郎物語』、三浦綾子『塩狩峠』、三島由紀夫『金閣寺』、水上勉『越前竹人形』

(チョウ ナンビル 岡山大学大学院文化科学研究科)